

高卒就職者における高校時代の経験学習に関する探索的研究

辰 巳 哲 子*

Exploratory research on learning from the experience of high school

TATSUMI Satoko

Abstract

The purpose of this study is to exploratory what kinds of experiences in high schools impact to basic skills. According to the idea of “Learning from experience” introduce by Matsuo (2006), examining the relationship of four experiences (Club activities, School events such as sports festival and cultural festival, Subject class and Part time jobs) and 11 skills. For the selection of the subject, in order to confirm a direct impact on the work from “experience of high school”, it was limited high school graduate employee. An analysis was undertaken of the questionnaires completed by 1730 with Internet monitor who work as regular employees (34.1%), conduct employees (10.0%), part time worker (46.9%) and dispatched worker (3.4%). The result shows students had different learning through four kinds of experiences. School event contribute collaboration and accomplishment, Club activities contribute mental strength and continuity, Subject classes contribute acquisition Confidence and Part time job contribute courtesy and learning from failure. As for the difference of course destination after graduating from high school, part time job experiences make a difference of learning “continuity and mental strength from Subject class. Finally, the issues of how to use existing activities in high schools are discussed.

Key words: learning from experience, high school, career education, subject class

1. はじめに

高校では平成22年の学習指導要領改訂によって、人間関係能力や自己管理能力などを含む、「基礎的・汎用的能力」（以下、基礎力）の育成を目的としたキャリア教育の実施が必須となった。これを受けて、各高校ではキャリア教育の計画策定が進められている。策定の状況について、国立教育政策研究所が2012年に実施した全国調査¹の結果によると、キャリア教育の計画を立てる上で最も重視した点は、「具体的な進路（就職先や進学先等）の選択や決定に関する指導・援助」（81.1%）であり、次に「社会人による講話など、職業や就労にかかわる体験活動を充実させること」（75.8%）が続く。本調査の結果を見る限り、高校では、キャリア教育の計画策定にあたって、これまでも実施されてきた進路決定指導に加え、新たに社会人講話などのイベント的活動を重視していることが伺える。しかし、基礎力をはじめとする能力は、『ある課題への対処能力のことで、訓練によって習熟するもの』という意味を内包する」（文部省、1996）と定義されており、この定義からは、すべての経験が、能力の育成を促す「訓練」の機会になっていると読み取れる。すなわち、能力の育成には「イベント的活動」だ

キーワード：経験学習、高校、キャリア教育、教科

*平成26年度生 人間発達科学専攻

けでなく、既存の活動（例えば教科学習や部活動など）も寄与していると考えられるが、後述のように高校での経験と育成された能力の関係を確認したものは少ない。そこで本稿では、高校時代の経験を通じて育成された能力について探索的に把握することにより、「イベント的活動」に依存しない、キャリア教育の在りようについて考察することを目的とする。

高校に焦点をあてるのは、以下2点の理由がある。第1に、前述の通り、学習指導要領の改訂によって、各高校では、基礎力の育成をいかにして学校教育に取り入れるか、計画の策定を迫られている。こうした状況を踏まえると、生徒らが既存の学校教育を通じてどのような能力を獲得しているのかを把握しておくことは、急務である。第2に、「学校での経験が社会に出た後にどのように役立っているのか」についての研究蓄積が、近年の大学教育を対象に、主に社会学の領域（例えば、清水ら、2013など）において進んでいる。大学では2011年に施行された、大学におけるキャリアガイダンス（教科課程内外を通じての社会的・職業的自立に向けた指導）の義務化により、単に専門知識や役割試行の場を提供するだけでなく、キャリア発達に対する集団的介入・支援をおこなう場としての役割も期待されるようになった（清水・三保、2013）。しかし、こうした能力は、発達段階に応じて少しずつ介入・支援される能力であり、大学段階の経験だけで獲得できるとは考えづらく、大学入学以前の能力開発の場である、高校における学習の在り様にも目を向ける必要がある。

例えば、高校における文化祭や体育祭は、他者と協働する能力の獲得を目指して実施されてきている。そして、高校の教科学習は、教科書に書かれた知識そのものを身に付けることだけでなく、例えば理科教育は自然現象の中にある問題を発見し、それを解決するための科学的思考力を育成することが目標の1つである（中教審、2008）。また、国語や英語その他多くの教科で取り入れられているディスカッションやディベートは、人間関係形成能力を育むことと無縁ではない（文部科学省、2013）。このように学校行事や教科学習は、那須（2012）が指摘するように、知識を学ぶことにより再現性が高まる「知識的学習」だけでなく、経験を通じて学ぶ「経験的学習」の2つの要素が含まれていると推察される。

しかし、高校段階の経験を通じた学習に関する実証的研究（例えば蒼下ら、2009）では、ある特定の授業や活動における事前事後の生徒の変容を基にした、効果検証の議論に終始することが多く、高校時代を通じて、個人が何を経験的に学習しているのか、実証的なデータは得られていない。そこで本稿では、社会人に対する遡及的調査を通じて、高校時代の経験を通じた学習を検討し、実証的なデータを示す。その際、高校時代の経験としては、高校生の生活時間に占める割合の1位2位にある、「学校」と「部活動」（ベネッセ、2013）を取り上げる。さらに、同調査の放課後時間の中で、勉強・テレビ・休息の時間を除き、生活時間に占める割合の高い、「アルバイト」を経験変数として用いた。「学校」「部活動」「アルバイト」経験のうち、「学校」については、カリキュラムのほとんどを占める「教科学習」と文化祭や体育祭といった「特別活動」とに分けて、各経験を通じて学習された内容を確認する。

次節以降の構成は以下のとおりである。第2節では、「基礎的・汎用的能力」および、経験を通じた学習に関する先行研究をレビューする。第3節では、分析で用いるデータについて説明する。第4節では分析結果を示し、最終節で分析結果をまとめるとともに、含意と今後の課題について述べる。

2. 基礎的・汎用的能力と「経験を通じた学習」に関する先行研究

本節では、「経験」と「学習」の違いを確認した上で、キャリア教育の必修化とともに国から提示された「基礎的・汎用的能力」と「経験を通じた学習」に関するこれまでの議論について、(1)「基礎的・汎用的能力」の構造、(2)高校での経験を通じた学習、を整理して、本稿との関連を述べる。

経験学習について、松尾（2006）は、経験が「知識・能力の変化を促す外界との相互作用」であるなら、学習は「知識・能力の変化」であると定義づけている。この考え方を基に、高校での例を挙げると、経験は、「授業に参加する」「部活動に参加する」ということになる。それに対して学習は、例えば、「参加した授業を通じてディスカッションスキルを獲得する」「文化祭の経験を通じて、協働の方法を獲得する」となる。本稿では、松尾（2006）の定義に基づき、経験と学習とを区別して用いる。その際、経験を通じた学習は「経験学習」と記す。その上で、「教科学習」、「文化祭や体育祭などの特別活動」、「部活動」、「アルバイト」の4つの経験がどのよう

な能力の変化(=経験学習)に寄与するのか、探索する。

2-1. 「基礎的・汎用的能力」とは何か

1999年にわが国の公文書に初出した「キャリア教育」は、その後2度に渡る定義の見直しがおこなわれた末、2011年には「社会的・職業的自立に向け、必要な知識、技能、態度を育む教育(中央教育審議会答申、2011)」と再定義されると同時に、キャリア教育を通じて育成すべき能力として「基礎的・汎用的能力」が定義された。つまり、我が国のキャリア教育は定義の見直しを繰り返しながらも、学校教育の新たな役割として、社会的・職業的自立のために必要な能力の育成を求めるようになってきている。

中教審(2011)によって示された能力の体系は、スーパーとボーンの職業適合性モデル(Super & Bohn, 1970)に基づいている。職業適合性モデルは大きく「能力(ability)」と「パーソナリティ(personality)」からなり、「能力」には「適性(attitude)」と「技量(proficiency)」が含まれている。そして、「技量」は、学力(achievement)と技能(skill)で構成される。技量とは、「スキルを達成したこと」(柳井、2005)、「現在到達している状態を現しており『現在何ができるか』を示す概念である」(渡辺、2003)。本稿では、特定の職業における職務遂行能力を把握することを目的としていないため、「適性」は扱わず、「技量」を狭義の「能力」として扱う。ここまでの議論をまとめると、本稿は、高校時代に「できることの変化」(=学習)に作用した出来事(=経験)は何かを探索的に明らかにする取り組みである。

2-2. 高校での経験を通じた学習に関する研究

生徒は学校での経験を通じて、社会的自立に必要ななどのような学習をしているのか—この問いに対する我が国における研究のアプローチは、主に教育方法学分野においてなされてきた。教育方法学の研究課題の1つは、「どのようにすれば教授による知識や技能の学習が子どもの人格の内面に影響して行動の実践力になり得るのか(長谷川、2008)」である。この問いに対するアプローチの方法は、授業分析や教科のモデル授業を通じて、対象科目への生徒の学習意欲がどのように変容したかを示す実践研究の蓄積が中心である。例えば、金山ら(2005)は、職場体験と連動させたソーシャルスキル教育の効果を示した。他にも、蒼下・福田(2009)は、社会系教科を、「生徒が将来市民として意思決定を迫られた時に必要とされる合理的な判断根拠(知識)を育む教科」であるとし、社会的事象に対する生徒の疑問を喚起する授業を実施した。その結果、生徒の学習に対する動機づけは高まり、学力も保証されたことが明らかになっている。しかし、こうしたモデル授業による実験を中心とした研究の成果は、いずれも単元や単発の授業実践の事前事後の差分を用いた枠組みで捉えたものが多く、高校時代を通じた個人の活動がどのような経験学習に貢献しているのか、そのメカニズムは明らかになっていない。

教科以外の活動経験に目を向けると、高校の部活動経験の効果に関する研究の蓄積がある。武村ら(2007)は、学業の達成動機および適応に関する22項目を取り上げ、高校生がスポーツ系部活に参加することで、2年後の学業での達成行動(宿題の提出頻度、学業への意欲、退学率、大学への進学希望率)および適応(学業や社会性に関する自己概念、自尊感情)などの14項目において肯定的効果が見出されたことを示した。また、文化祭での集団体験に着目した萩原(2013)によると、文化祭での集団体験は人間関係能力を変化させるとしている。高校時代のアルバイト経験が能力に与える影響を確認した研究は少ないが、杉山(2007)では、大学生を対象にした縦断調査の結果から、もともと対人志向性が高い群においては、アルバイト経験が対人志向性をより高めることを示している。

2-3. 先行研究と本稿における分析のポイント

先行研究をまとめると、以下の通りとなる。(1)我が国のキャリア教育は、学校教育の新たな役割として、社会的・職業的自立のために必要な能力の育成を求めるようになってきている。(2)学校での学習と能力の関係について、教科授業では、モデル授業の効果に焦点化した研究蓄積が中心で、高校時代を通じた経験学習については未知である。部活動経験は達成行動や適応への影響があり、大学でのアルバイト経験は対人志向性との関係があることが明らかになっている。ただし、個人の高校時代の「経験」が具体的にどのような「学習」に貢献しているのかは、明らかになっていない。そのため、社会に出た後の能力に寄与している高校時代の学習を捉えるには、高校

時代に「できるようになったこと」(＝学習)に作用した出来事(＝経験)を、まず明らかにする必要がある。

以上の知見を踏まえ、本稿ではまず、高校時代を通じた個人の「経験学習」に着目し、各経験とそれを通じて得られた学習との関係を探索的に検討する。

3. 経験学習についての分析課題と方法

3-1. 分析課題

前述のように、高校時代を通じた主な経験のうち、教科学習については、それがどのような「学習」に影響しているのか、学校の進路傾向による「学習」の違いがあるのかは、未知である。そこで、ベネッセ(2010)が実施した、「社会で必要な能力と高校・大学時代の経験に関する調査」のうち、大学生に対する自由回答の結果をまとめたリストを援用した。この調査は、民間企業を受験した大学4年生1,793名に対し、高校時代に得られたと考えている事柄をまとめてリスト化したものである。具体的には、表1の通りである。

表1. 経験学習項目

1	協調性やチームワーク力が養われたこと(以下、協調性)
2	精神的なタフさ、精神力が養われたこと(同、精神力)
3	何かをチームで達成することの喜びを知ったこと(同、達成感)
4	その活動を通じて得られた人脈や人間関係(同、人間関係)
5	対人コミュニケーション力が養われたこと(同、コミュニケーション)
6	継続的に努力する習慣や態度が身についたこと(同、継続性)
7	礼儀や上下関係の基本が身についたこと(同、礼儀)
8	失敗や困難な体験から学ぶことができたこと(同、失敗からの学習)
9	集団で物事を進める基本的なスキルがついたこと(同、集団スキル)
10	自分に自信がついた(同、自信)
11	突発的な出来事に対処できるようになった(同、対処)

上記を援用し、以下の2つの探索課題を検討することとした。

- (1) 4つの経験はそれぞれ、どのような機能を持ち、個人が各経験から学習している内容にはどのような違いがあるのか
- (2) 教科の経験学習は、所属する学校の進路傾向や高校での成績といった個人属性によって異なっているのか

3-2. 本稿の枠組みと調査方法

上記の課題を検討するため、次の調査を実施した。調査方法は、全国の傾向を捉えるため、インターネット調査会社である株式会社クロス・マーケティング(以下、調査会社)を通じ、2012年12月にWEB調査を実施した。本調査会社のモニターは日本のインターネット利用人口の構成にほぼ近い形で、30~40代が全体の6割を占めている。萩原(2009)は、訪問留め置き調査とインターネット調査のそれぞれから得られる回答を比較した結果、訪問留め置き調査において、より調査対象者のバイアスとなる変数が多いこと、さらに、インターネットモニター調査は、留め置き調査に比べ平均年収が高く、学歴では大卒が多いことを指摘している。そのため、本稿では、インターネットモニター調査の利点である、全国モニターからの短期間での情報収集が可能な点を活かしつつ、学歴については、高卒者に限定した。具体的には、調査会社が保有する日本在住の回答モニターのうち、「高卒で卒業直後から働いている」と登録していた18歳~23歳の男女2,000名を有効回答数の目標とし、有意抽出法である割り当て法によって対象者を確保した。高卒就職者に限定したのは、大学時代の経験の影響を排除するためである。さらに、現在働いている者のうち、高校時代の経験についての記憶バイアスの影響を考慮した結果、就職後6年目までの者に対して、高校時代の経験から獲得した能力を確認した。さらに大学進学率の高い都市部を除き、回答時点での居住地域が、北海道・東北・北関東・中部・近畿・中四国・九州である者の均等割り付けをおこなった。その際、全国的な傾向を捉えるために、どの地域集団も200名以上になるようにした。高

卒就職後の年数は1年刻みで等分とし、性別は男女半数ずつとした結果、有効回答者数は1,730人で、雇用形態別に、正規雇用者590人(34.1%)、契約社員・嘱託173人(10.0%)、社会人アルバイト²812人(46.9%)、自営・自由業66人(3.8%)、派遣59人(3.4%)、業務委託30人(1.7%)であった。出身学科は、普通科1,141人(66.0%)、専門学科427人(24.7%)、総合学科76人(4.4%)、その他86人(5.0%)であった。回答者の出身学科について、平成23年度の高等学校学科別就職者数(文部科学省)と比較してみると、普通科は36.6%、専門学科56.1%、総合学科7.3%であった。つまり、実際の人数に比べ、本調査モニターは、普通科出身者の割合が高い。

4. 分析結果

4-1. 4種類の経験を通じた学習

教科学習・学校行事については、積極的な取組みの有無を、部活動・アルバイトは経験の有無を確認した。その結果、「あなたは教科の学習活動の中で1つでも積極的に取り組んだものはありますか」に対して、「はい」と回答したのは、57.5%、「いいえ」は42.5%だった。学校行事は、「はい」が62.7%、「いいえ」は37.3%である。部活動経験があるのは、61.4%で、アルバイト経験がある者は、52.1%だった。次に、「はい」と回答した者を対象に4種類の経験それぞれについて、「その経験を通してあなたが得られたことは何ですか？主なものをお答えください」と尋ね、表1に示した11の経験学習項目から複数回答を促した。そして、経験と学習の関係を分析するため、経験があった者を対象に、各経験学習項目(表1)を被説明変数、4種類の経験(部活動、学校行事、教科、アルバイト)を説明変数としたロジスティック回帰分析をおこなった。

なお、経験学習項目は、経験ごとに尋ねたが、分析では、経験学習の変数を以下の手順で作成した。まず、11の経験学習項目(表1)ごとに、4種類の経験について、1つでも経験学習があれば「1」、まったく経験学習がなければ、「0」とした。その上で、ロジスティック回帰分析では、11の経験学習項目(表1)をそれぞれ被説明変数として、4種類の経験を説明変数として分析した。オムニバス検定の結果によると、いずれの経験学習においても、モデルは有意であり、4種類の経験を含めたロジスティック回帰は有効であることを示している(表2上)。オッズ比の結果を、学習ごとに詳細に確認したのが表2下である。続いて結果の解釈をおこなう。

以上に見てきた結果は、第1の検討課題である「4つの経験はそれぞれ、異なった機能を持ち、個人の経験学習は異なる」ことを示す結果となった。4つの活動経験ごとに、2倍以上のオッズ比が見られたものを中心に確認を進めると、まず、部活動については、「協調性やチームワーク力が養われたこと」「集団で物事を進める基本的なスキルがついたこと」といった、集団やチームの中での貢献の仕方、集団での物事の進め方といった経験学習があり、「その活動を通じて得られた人脈や人間関係」への発展も見られた。一方で「対人コミュニケーション力が養われたこと」については有意な結果は得られていない。これは、部活動というある種の閉じられた同質集団か否かによって効果が異なっていると解釈することができよう。つまり、部活動は、同質集団の中での貢献やチームとしての物事の進め方を経験学習する有効な機会になっていると考えられる。さらに、部活動経験は、「精神的なタフさ、精神力が養われた」という機能も持つ。「精神力」の経験学習が2倍以上のオッズ比を持つ

表2. 高校時代の経験学習のロジスティック回帰分析結果

	協調性	精神力	達成感	人間関係	コミュニケーション	継続性	礼儀	失敗学習	集団スキル	自信	対処
オムニバス検定	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
Nagelkerke R2乗	0.256	0.072	0.210	0.087	0.191	0.047	0.215	0.039	0.042	0.126	0.043
Hosmer と Lemeshowの検定	0.017	0.244	0.528	0.091	0.034	0.522	0.049	0.790	0.599	0.177	0.285
オッズ比	協調性	精神力	達成感	人間関係	コミュニケーション	継続性	礼儀	失敗学習	集団スキル	自信	対処
1. 部活動	2.274***	2.287***	1.194	2.068***	1.202	1.698***	1.612***	1.369*	1.519**	1.627***	1.268
2. 学校行事	5.151***	0.991	7.105***	1.636**	2.152***	1.299*	1.165	1.545**	1.882***	1.794***	2.230**
3. 教科	1.059	1.594***	0.926	0.921	0.911	1.363*	1.020	1.018	0.929	2.322***	0.888
4. アルバイト	1.260*	1.441**	1.227	2.258***	4.568***	1.360**	5.972***	1.719***	1.343**	1.415**	2.159***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

表 3. 学習に応じた活動の寄与

学習	活動（部活動・学校行事・教科・アルバイト）の寄与	オズの解釈
協調性	学校行事＞部活動＞アルバイトの順に寄与	学校行事に積極的に参加した人は、そうでない人に比べ、協調性の学習は約5.2倍高まる。
精神力	部活動＞教科＞アルバイトの順に寄与	部活動に積極的に参加した人はそうでない人に比べ、精神力の学習は約2.3倍高まる。
達成感	学校行事が寄与	学校行事に積極的に参加した人はそうでない人に比べ、達成感の学習は約7.1倍高まる。
人間関係	アルバイト＞部活動＞学校行事の順に寄与	アルバイト経験のある人はそうでない人に比べ、人間関係の学習は約2.3倍高まる。
コミュニケーション	アルバイト＞学校行事の順に寄与	アルバイト経験のある人はそうでない人に比べ、コミュニケーションの学習は、4.6倍高まる。
継続性	部活動＞アルバイト＞教科＞学校活動の順に寄与	部活動経験のある人はそうでない人に比べ、継続性の学習は1.7倍高まる。
礼儀	アルバイト＞部活動の順に寄与	アルバイト経験のある人はそうでない人に比べ、礼儀の学習は、約6倍高まる。
失敗からの学習	アルバイト＞学校行事＞部活動の順に寄与	アルバイト経験のある人は、経験のない人に比べ、失敗からの学習は約1.7倍高まる。
集団スキル	学校行事＞部活動＞アルバイトの順に寄与	学校行事に積極的に参加した人はそうでない人に比べ、集団スキルの学習は、約1.9倍高まる
自信	教科＞学校行事＞部活動＞アルバイトの順に寄与	教科に積極的に参加した人はそうでない人に比べ、自信が約2.3倍高まる。
対処	学校行事＞アルバイトの順に寄与	学校行事に積極的に参加した人はそうでない人に比べ、対処スキルは約2.2倍高まる。

は、4種の活動中、部活動のみであることを考慮すると、「精神力」の経験学習に、部活動は欠かせない活動であると考えられる。

次に、学校行事に着目すると、「何かをチームで達成することの喜びを知った」経験学習を促進しているのは、今回扱った4種の活動中、学校行事のみであり、積極的に取り組んだ場合とそうでない場合とでは7倍以上の差がある。さらに、「協調性やチームワーク力が養われた」についても、積極的に取り組んだ場合には5倍以上のスコアが確認され、この結果は、「文化祭での集団体験は人間関係能力に影響する」とした先行研究を支持する結果となった。

部活動と学校行事を比較すると、「協調性やチームワーク」学習への効果は共通しているが、「精神的なタフさ、精神力」への学習は部活動にしか見られず、「何かをチームで達成することの喜びを知った」という学習は学校行事にしか確認されていない。この結果が意味しているのは、部活動と学校行事が持つ「ゴール」への重みづけの違いではないかと推察される。部活動の場合、目に見える成果が求められることが多いが、文化祭や体育祭は行事までの日程が区切られており、そこに至るまでのプロセスが重視される。こうした活動間の持つ機能の違いが、個人の学習の違いとして表出したのではないかと推察される。

次に、教科学習を確認する。教科学習に積極的に取り組んだ場合は、取り組んでいない場合に比して「自分に自信がついた」経験学習は、2倍を超える。4種類の経験の中でオズ比が2倍を超えるのは教科学習のみである。このことは、教科学習の効果が、自分に自信をつけることに大きく寄与していることを示している。

学校外の経験であるアルバイトの経験学習は、多岐に渡っていた。「礼儀や上下関係の基本が身についたこと」は、経験していない者に比べ、約6倍の効果が見られた。そして「対人コミュニケーション力が養われたこと」「その活動を通じて得られた人脈や人間関係」のいずれも、他の3種類の活動に比して経験学習への寄与はもっとも高い。これらの対人能力は、部活動で見られたような同質集団における対人能力とは異なり、多様な他者との関係における対人能力であると考えられる。また、アルバイト経験では「突発的な出来事に対処できるようになった」という経験学習が確認された。学校とは異なる、非日常場面での経験が、多様な他者との関係構築や、対処の経験学習を促進していると考えられる。

4-2. 教科学習における経験学習の差異を規定する要因

次に、第2の検討課題、つまり、教科からの経験学習が、所属する学校の進路傾向や高校での成績といった個人属性によって異なっているのではないかという点について検討する。検討にあたっては、11の経験学習項目のうち、教科経験の寄与が確認された、「自信」「継続性」「精神力」を取り上げる。これらの学習と個人属性との関係を確認するために、所属する学校の進路傾向をコントロールした上で、①部活動経験の有無、②高校での成績、③アルバイト経験の有無の3つの側面から傾向を確認したのが、以下表4である。進路傾向は、「進学者が多い高校（以下、進学校）」「就職者が多い高校（以下、就職校）」、「進学者と就職者が半々の高校（以下、半々）」の3分類の中からの選択とした。

表4. 活動の有無別、教科における経験学習の差異

①部活動経験					②成績					③アルバイト経験				
自信	部活 経験	進路傾向			継続性	部活 経験	進路傾向			精神力	部活 経験	進路傾向		
		進学校	就職校	半々			進学校	就職校	半々			進学校	就職校	半々
1	0	24.1%	24.2%	28.2%	1	0	29.5%	31.2%	33.3%	1	0	31.4%	48.6%	59.3%
	1	75.9%	75.8%	71.8%		1	70.5%	68.8%	66.7%		1	68.6%	51.4%	40.7%
	N	100.0%	100.0%	100.0%		N	100.0%	100.0%	100.0%		N	100.0%	100.0%	100.0%
		(216)	(99)	(78)			(193)	(80)	(69)			(102)	(35)	(27)
1	上位10 位以内	44.0%	55.5%	46.2%	1	上位10 位以内	43.0%	60.0%	39.1%	1	上位10 位以内	57.9%	54.3%	55.5%
	下位5 位以内	4.6%	6.1%	1.3%		下位5 位以内	2.1%	7.5%	4.3%		下位5 位以内	4.9%	8.6%	3.7%
	その他	51.4%	38.4%	52.6%		その他	54.9%	32.5%	56.5%		その他	37.3%	37.1%	40.7%
	N	100.0%	100.0%	100.0%		N	100.0%	100.0%	100.0%		N	100.0%	100.0%	100.0%
		(216)	(99)	(78)			(193)	(80)	(69)			(102)	(35)	(27)
1	0	54.2%	49.5%	48.7%	1	0	59.1%	45.0%	40.6%	1	0	61.8%	51.4%	48.1%
	1	45.8%	50.5%	51.3%		1	40.9%	55.0%	59.4%		1	38.2%	48.6%	51.9%
	N	100.0%	100.0%	100.0%		N	100.0%	100.0%	100.0%		N	100.0%	100.0%	100.0%
		(216)	(99)	(78)			(193)	(80)	(69)			(102)	(35)	(27)

注：0 はなし、1 はありを意味している

表4によると、①部活動経験がある場合、いずれの進路傾向であっても、「自信」「継続性」の経験学習比率は高い。「精神力」は、進学者が多い高校においてのみ、経験学習比率が高い。②成績は、いずれの進路傾向であっても3つの経験学習すべてにおいて、下位5位より上位10位以内の者のほうが、経験学習比率が高い。③アルバイト経験の有無は、「自信」の経験学習においては、いずれの進路傾向においても大きな違いは見られない。しかし、「継続性」「精神力」は、進学者が多い高校では、アルバイト経験のない者のほうが、経験学習比率が高い。就職者が多い学校では、アルバイト経験のある者のほうが「継続性」の経験学習比率が高い。

5. 結果のまとめと考察

5-1. 結果のまとめ

主な分析結果を要約すると以下の2点に集約される。

1) 4つの活動において、経験している場合と経験していない場合で2倍以上の学習が見られたのは、表5に示した経験学習である。部活動、学校行事、教科、アルバイトではそれぞれ経験学習の内容は異なっており、部活動では、同質集団内の対人面での経験学習に加え、精神力といったセルフマネジメントにかかる経験学習が確認された。学校行事では、協調性や達成感、コミュニケーションといった経験学習が確認され、学内での経験と

しては、唯一突発的な事柄への対処という経験学習が確認された。教科の経験学習では「自信」が高い。4つの経験中、唯一の学校外の経験であるアルバイトでは、礼儀やコミュニケーション、人間関係といった、多様な他者と接する機会を活かした学習が確認され、さらに学外での現実社会での経験の特徴として、突発的な対処の経験学習が多いことが示唆された。

表5. 経験学習の概略

経験学習	部活動	学校行事	教科	アルバイト
協調性	×2	×5		
精神力	×2			
達成感		×7		
人間関係	×2			×2
コミュニケーション		×2		×4
継続性				
礼儀				×6
失敗からの学習				
集団スキル				
自信			×2	
対処		×2		×2

注：数字は、「活動なし」と比較して何倍の「学習」があったかを示している

2) 教科学習から「自信」「継続性」を学習している生徒は、学校の進路傾向によらず、部活動経験があること、成績が下位より上位の者のほうが多い傾向にあることが示された。さらに、進学者が多い高校では、アルバイト経験のない者のほうが、教科を通じた「自信」、「継続性」、「精神力」の経験学習比率が高いことが示され、一方、就職者が多い高校では、アルバイト経験のある者のほうが、「継続性」の経験学習比率が高いことが示された。

5-2. 高校段階の経験学習についての考察

本稿の結果からは、既存の教育課程上の取組みが、個人の経験学習を促進していることが示された。このことは、当初の問題意識である、「イベント的活動」に依存しない、キャリア教育の在りようを検討し得る結果となった。卒業生らは、部活動や学校行事、教科授業、そしてアルバイトから多様な学習をしている。本稿では、このような活動の組み合わせにより、キャリア教育で目指す能力の育成を促進し得ることを示すことができた。さらに一部の経験学習は個人の属性によって異なっているため、個人の状況にあわせて、既存の活動を活用しながら、意図された経験機会を作っていくことが可能になると考える。

例えば、文化祭や体育祭といった特別活動の経験は、クラスで課題を設定し、共通の目的に向かって協働することが求められる経験機会を通じて、協調性や達成感、コミュニケーション、対処という経験学習を促進していた。一方で、精神力は、特別活動からの経験学習よりも、部活動による経験学習のほうが有効であり、「自信」は特別活動や部活動経験よりも、教科授業からの経験学習が有効であった。このように、活動によって得られる経験学習は異なっているため、キャリア教育の計画策定をする際には、既存の活動を活用しながら、経験学習の補完をおこなうことが求められる。そして、4種類の経験のうち、唯一学校外の経験として設定したアルバイト経験は、「礼儀」の側面において、他の経験には見られない経験学習を促進していた。この結果は、キャリア教育を推進していく中で、こうした学校外の経験も視野に入れた経験学習機会の策定を検討する必要があることを示唆している。

さらに、個人や学校の進路特性によって、教科経験を通じた学習は異なっていた。本稿の第2の検討課題に対する分析の結果からは、所属している高校の進路傾向をコントロールした際に、部活動経験および成績による経験学習の違いが確認されている。このことは個人の属性や学校の進路特性に応じた経験機会を提供することの必要性を示している。

本研究の成果の1つは、「イベント的活動」が計画策定にあたって重視されていた高校のキャリア教育に、既

存の活動が貢献し得ることを示したことである。さらに、高校での経験を通じた学習の促進をおこなうためには、個人の高校段階の成績や、部活動経験に応じた教科授業の在り方を検討する必要があることを示す結果も得られた。教育社会学において「学校の内在的機能」つまり、学校教育課程の機能に着目した研究が少ない中で、本稿は、個人の高校における経験を通じた学習の一部を示すことに貢献できたと考える。

5-3. 残された課題

本稿では、既卒就業者が考える高校時代の経験を通じた学習について、全国的な傾向を捉えるために、インターネット調査を用いて、回想法による調査から、高校時代の経験とその経験を通じて学習した事柄についてデータに基づいた検討をおこない、彼らの過去の「学習」を取り出そうと試みた。ただし、高校時代の経験を通じた学習については、大学生への回想法から生成されたリストに基づいた検証に留まっている。また、前述した、学校から社会への移行を前提とした基礎的・汎用的能力が、今回確認した学習を通じて、社会に出た後にどのように発揮されたかについては未知のままである。専門学校や大学への進学率が上昇している中、高校での経験がその先の進路においてどのように活かされているのか、今後、学校での経験を通じた学習が、社会人になってからの基礎力の活用にどのように影響しているのかを検討する必要があると考えている。

【註】

- 1 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター(2012)『キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査』。本調査は、学校調査、学級・ホームルーム担任調査、児童生徒調査、保護者調査、卒業生調査があり、本文中ではこのうち、学校調査の結果を記した。
- 2 本稿での社会人アルバイトとは、学校卒業後にアルバイトで主たる生計を立てている者をさす。

【引用文献】

- ベネッセ教育研究開発センター、2010、『社会に必要な能力と高校・大学時代の経験に関する調査』、ベネッセ教育開発センター冊子。
 ——、2013、『大学データブック』、ベネッセ教育開発センター。
- 長谷川榮、2008、『教育方法学』、協同出版。
- 金山元春・中台佐喜子・江村理奈・前田健一、2005、「中学校における職場体験学習と連動したソーシャルスキル教育」、『広島大学心理学研究』、5巻、pp. 131-148。
- 松尾睦、2006、『経験からの学習：プロフェッショナルへの成長プロセス』、同文館出版。
- 文部省、1999、「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」、中央教育審議会答申。
- 文部科学省、2011、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」、中央教育審議会答申。
 ——、2013、「言語活動の充実に関する指導事例集」、<http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/gengo/1322283.htm>、20130730。
- 那須一貴、2012、「プロジェクト・マネジメントの学部教育的意義：社会人基礎力育成に向けたプロジェクト・マネジメント教育の活用（〈特集〉プロジェクトマネジメント教育）」、『プロジェクトマネジメント学会誌』、第14巻、第2号、pp. 21-26。
- 萩原牧子、2009、「インターネットモニター調査はどのように偏っているのか」、『Works Review』Vol.4、pp. 6-19。
- 萩原菜穂美、2013、「文化祭での集団体験を通じた人間関係能力の変化に関する研究」、『兵庫教育大学学位論文』。
- 清水和秋・三保紀裕、2013、「大学での学び・正課外活動と「社会人基礎力」との関連性」、『関西大学社会学部紀要』、44巻、2号、pp. 53-73。
- 杉山成、2007、「アルバイト経験はキャリア意識の形成にどのような影響を与えるのか」、『小樽商科大学人文研究』、第113輯、pp. 87-98。
- Super, D.E. & Bohn, M. J. Jr. (1970), *Occupational Psychology*, Belmont, California: Wadsworth Publishing Company, Inc. (=1973, 藤本喜八・大沢武志訳『企業の行動科学6 職業の心理』、ダイヤモンド社)。
- 蒼下和敬・福田正弘、2009、「社会認識の質的な成長をめざす授業の研究(2)高等学校地理における探求型授業の実践」、『教育実践総合センター紀要』、8巻、pp. 73-82。
- 武村・前原・小林、2007、「高校生におけるスポーツ系部活参加の有無と学業の達成および適応との関係」、『教育心理学研究』、第55集、pp. 1-10。
- 渡辺三枝子、2003、『キャリアの心理学』、ナカニシヤ出版。
- 柳井晴夫、2005、「適性試験と総合試験——適性試験を中心にして」、『教育測定・カリキュラム開発講座研究会資料』。